The Real Face

取材・文／中村悠介　撮影／福森クニヒロ
取材協力／park cafe

ニューウェーブ・オブ・ニューウェーブが語る、「おもしろい」と「つまんない」。

中西俊夫
なかにし・としお

「好き勝手」の京都 エクストリームが「おもしろい」

「なんか、ちょっと月イチくらいで京都に来たいな、と(笑)。うん」。

ここ最近、中西俊夫が京都にやってきている。ライブやDJでの入洛なのだが、お忍びのフットワークと呼べそうなとても小さなパーティでのアクトだったりする（入場無料でだったりする）。実際のところ、京都の人との縁、以外の多くの理由はないそうで、来月以降は定期的に来ることになるかも、というから驚いた。とりあえずは京都の印象から聞いてみることにする。

「京都はねぇ、今もエクストリームだなって思うよね。東京とか、すっとばして意外とロンドンやニューヨークと直結して繋がってたり。そういう京都のアンダーグラウンドみたいなものがおもしろいな、と思いますね。世界と直結してる感じがするし、インターナショナルだよね。EP-4（'83年作の『昭和大赦』が先日CD化されたばかり。京都の伝説的「ノーウェーブ」バンド）の時代からそうだし。それこそ昔のフォークの時代から日本のメインストリームから外れたようなことをやってるのが反対にインターナショナルになっちゃってる。要するに外国人が見たときに、日本のメインストリームはつまんないって思うんだろうね、多分。京都に移住？ いやぁ、京都は夏がね〜。暑い。この前、来たときなんか暑過ぎて前に進めなかったもん（笑）」。

TYCOON TO$Hこと 21世紀も、歩くニューウェーブ

中西俊夫。職業＝ニューウェーブ。そう言えばいかにも虚業家の体だけれども、自身のポジションについて、この年季の入った自由人にあえて尋ねてみたい。

「もうあえて説明はしないようにしてる。藤原ヒロシみたいに、プロフィールはなし(笑)。これまでのプロフィールとか、もぉいいや！ 中西俊夫、だけでいいよ」。

それでは、言うまでもない野暮はこっちに任せてもらおう。またの名を「TYCOON TO$H」こと中西俊夫とは？ ひととなりを簡単に説明してみよう。

'70年代後半、来日したトーキングヘッズのデヴィッド・バーンは東京でニューウェーブシーン自体の存在に驚いたらしいけれど、その小さなムーブメント（とはいえ世界同時進行だった）の中心にいたのがプラスチックス。そのバンドを率い、その後メロン、ウォーターメロン、LOVE T.K.O、野宮真貴とのユニット、プラスチック・セックスなど、数々のプロジェクトで活動。その音楽性はパンク、テクノポップ、ダブ、エキゾ／ラウンジ、レゲエなどなど、全く一筋縄ではいかない。加えて、ここ最近の一例としては、昨年再発売された'83年作のソロアルバム（当時はカセットブック）「HOMEWORK」なんてヒップホップ／コラージュの先駆的作品（鉛の装丁！）でフレッシュな再評価があり、またその一方でTOWA TEIの近作「FLASH」収録のマ・マ・マ「マイシャローナ」の熱唱も記憶に新しい…。と、まさに「などなど」のアーティストで、'80年代風に言えば、「スキゾフレニック！」なんて形容できるのかもしれない。しかし、出発点であるプラスチックスはイラストレーター中西俊夫、スタイリスト佐藤チカ、グラフィックデザイナー立花ハジメという非・音楽家による集合体だったわけで、いわばあらかじめ門外漢のアティチュードがキーだったと考えることができる。ラフに言い換えてみれば、現在もそんなアマチュアリズムこそ中西俊夫のユニークな実験精神の源であり、センス・オブ・ニューウェーブ、となっているのではないか。

それを証明する、かどうかは解らないが、この日、現れた中西俊夫はボンテージパンツにアディダスのシルバー（万歩計付き）マイクロペーサー、というコーディネイトで、過去のパンク／ニュウ

ェーブをひきずった中年の年輪 は微塵も感じさせない…。

と、いうことでレジェンドはこのあたりにして、ナウの話をするってのが筋ってものでしょう。それは摩訶不思議でカッコイイ新作が発売されているからに他ならない。

LET ITのDUB＝なすがままダブ

「LET IT…」とくれば思いつくのは、ビートルズの「BE」。もしくはローリングストーンズの「BLEED」。またはヴィヴィアン・ウエストウッドの「ROCK」あたり、だけれども正解は「LET IT DUB」。元ナチュラルカラミティーのクニ杉本（最近は立花ハジメのバンド「The Chii」のベースとして活躍中）との共作だけれど、なんて中西俊夫らしいタイトル！ もちろんダブ、とはいえ単なるダブ作品じゃないことはヘキサゴン仕様のジャケットからして一目瞭然（?）だ。

「そうだね、『BE』でもあるし、『BLEED』でもある。そういう歴史的な流れを経て（このアルバムが）あるっていうか。でも、たまたまね、この制作と同時進行でドキュメントを撮ってて、というか撮られっぱなしっていうか。それで『LET IT BE』（なすがままに）っていうのは頭にあったのね。ストーンズの『ワン・プラス・ワン』みたいなものを想像してるけど」。

その映像は現在編集中らしいが、CDの方も冒頭から残響に身を任せたい「なすがまま」的宇宙が拡がっている。曲タイトルもやっぱりちょっと変わっているから紹介してみたい。中西俊夫による21世紀の電子ダブの気配が少し伝わるかもしれない。

「電子音楽作品3番」「虚構の有名人」「プラスチックYMO」「ブライアン・イーノ」（すべて邦題）と意味深なタイトルが並んでいる。今作はラストの「世界の終わり」まで全18曲が繋がった構成になっているが、インストゥルメンタルだけでなく（お世辞にも決して巧いとはいえないがファンならおなじみの）ロマンチシズムほとばしるヴォーカルも堪能することができる。

初期衝動とアンチ・コントロール じゃないと「つまんない」

続けて、このカオティックかつコスモティックな今作について聞いてみる。

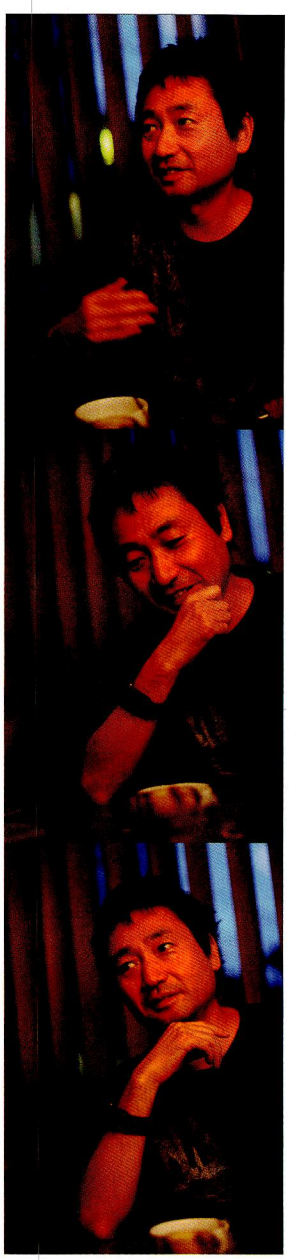
「偶然性を重視してるアプローチです。その方が面白かったりするし。全部コントロールされてる音楽はつまんなかったりするし。音楽っていくらでも数学的になるんだけど、数学的にすればするほどつまらない、と思う。自分が驚くようなことが起こらないと失敗だと思うんだよね。予測できるのは、たかが知れてるっていうか。まぁ、たとえば、デヴィッド・リンチなんかもそうだと思うんだけど、自分の予測外の超自然現象（笑）が起きないと自分の中では失敗作。この考え方は、ず～っと、ですね。最近はDJもしてるんだけど。iPodで。iPod DJ（笑）。iPodでDJすることのいいところはシャッフル（機能）があるでしょ？ あれを使って勝手に曲を選ばせる。偶然性でつながっちゃうでしょ？ でもたまに同じ曲、例えばディーボの『モンゴロイド』ばっかりシャッフルされちゃうとダメだから、そこは操作するけど。そういう意味では、『iPod対自分』（笑）。まさにチャンスミーティングなんだけど、アナログとかCDでコントロール出来過ぎちゃうとつまんない。面白いよ。でも（どんな曲がプレイされるわからないから）怖いよ。ビビる時があるけどダメな時はないね。（アイデアは）初期衝動的なものだね。やっぱりニューウェーブ、パンクの衝動的なものに戻ってくるというか。バンドでも、いくらヒッピーみたいなことをやろうとしても、こっちに戻ってきてしまうっていう。まぁ、根がヒッピーじゃないからね（笑）。根はサーファーでもヒッピーでもないけど。根は…なんだろ？ パンクかな。その前は加山雄三とかGSだったりエルヴィス（・プレスリー）だったりするかもね。自分がヴォーカリストとは思ってないけど、歌だけのアルバムも作ってみたい。けど、それが一番難しい。そういう意味でギターとヴォーカルで成立する世界、ニール・ヤングにしろ、JJケイルにしろ、憧れてました」。

「衝動を大切に」プラスチックス再結成

さて、冒頭の再結成の話。ここ最近YMOやサディスティックミカバンドの例もあることだし、リップサービスにしてはちょっと冗談キツ過ぎ？ ほんとのところは？

「もう、そろそろプラスチックス（の再結成）に移行する。再結成のキッカケは立花ハジメがやる気になっている、それがまず珍しいこと（笑）。それに背中を押されて。30年に一回くらいのことだから。『衝動を大切にしようよ』って。この歳になってプラスチックスの新曲を作るとは思わなかったな。ハジメが家に来てこんな曲ができたっていって、歌詞を書いて。昔と作り方は変わらない。それを変えちゃうとプラスチックスじゃないから」。

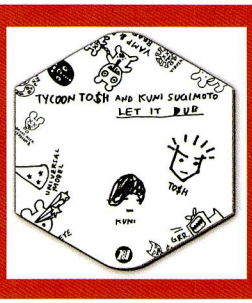
ちなみにプラスチックスの新曲のタイトルは「.com」というそうだ。♪すべてはコピー、とピコピコの電子音で歌ってから27年。世紀をまたぐニューウェーブ・バンドがニューウェーブ・リバイバルの時代に突如ワープ。それじゃ、ライブはやっぱり「エクストリーム」な都市が似合うんじゃないかな？ ♪ウェ～ルカム・プラスチックス！ 来月も待ってます。



中西俊夫（なかにしとしお）

'79年、プラスチックスとして英国「ラフトレード」より「COPY ROBOT」でデビュー。その後、LOVE T.K.O.、SKYLAB、Water Melonなどのバンド、ユニットで活躍。'87年、高木完、藤原ヒロシらとともに日本初のヒップホップレーベル「MAJOR FORCE」を設立する。'92年からはロンドンに移住。2007年、帰国後初となるTYCOON TO$H名義での『LET IT DUB』をリリース。イラストレーターでもある。 TO$H自身の新作への赤裸々（?）なコメントは「TYCOON TO$H KINGDOM」（http://www4.airnet.ne.jp/mor/tosh/）で。

information



TYCOON TO$H AND KUNI SUGIMOTO
『LET IT DUB』

20001-001 · 20001（ニマンイチ）
2500円（税込み）
発売中

最近のライブでも使用されている京都は［下村音響］のピュンピュンマシーンは今作でも活躍??「ながら」で聴けない無重力音楽。本作に寄せられたコメント、高木完氏いわくの「東でも無ければ西でも無い北でも無ければ南でも。用意ができたら旅の始まり、地図は無し！」に異議無し！